わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70 | 湯島：1971－93 | 和光：1994－

27期

辣腕弁護士に学んだ民事弁護修習



会員　中村 順子（27 期）

27期ですので1973年からの修習です。大阪修習でした。生まれも育ちも大阪だったので，なんとなく大阪で修習しました。

民事弁護の実務修習を，亡き宮崎乾朗先生の事務所でさせていただきました。先生は，後に日弁連の民事暴力対策本部委員長をされ，暴力団と戦われました。浅黒い顔，太い声で放たれる大阪弁，その面立ち，見るからにドスの効いた凄みのある弁護士でした。損保会社その他多数の会社の顧問をされており，やり手の先生でした。

私は，先生と一緒に法廷に行くことなど殆どなく，若い先生方について歩く毎日でしたが，ある日，あんまり放っておいても悪いとでも思われたのか，先生のお話を聞く機会がありました。その事件は，建物の建築費が高すぎるのではないかという事件だったそうです。設計士を反対尋問したときのお話でした。反対尋問する弁護士は，建築の専門家である設計士の専門知識と戦うことになります。しかし，建築の全部について勉強するなど時間的に不可能。そこで先生は，作戦を立てて勉強されたということでした。

当日の尋問では，建築材料として使われた木材の材質について，

先生「それはマサですか？」

設計士「いいえちがいます。」

先生「それでは（材料費が）高すぎるのではありませんか？」

設計士「そうですね。」

という設計士の回答を引き出した，というお話でした。

「マサ」というのは，柾目のことで，上下にまっすぐ通った木目のことです。反対語は板目。柾目は板目より値段が高いのです。使用された木材が柾目か板目かという点に着目し，更に柾目のことをそのまま「まさめ」と言わず，「マサ」という業界用語を使ってガツーンと喰らわしたというわけです。業界用語を使ったので，設計士は，この弁護士は，相当に知識があるようだ，嘘は言えないと思ったのだろう，というお話でした。反対尋問というのは，こういうふうにやるんだと，このお話を聞いた時のことが，今でも強く記憶に残っています。私も，一生に一度でもいいから，こういう胸のすくような尋問をしてみたいと思ったものです。

法廷での，こういう尋問ややりとりを聞いていて，相手方や傍聴人が宮崎先生を見込んで事件や顧問の依頼が来るのだと話してくださいました。

さて，最近は，弁護士の就職難が言われています。しかし，私に言わせると，そんなことは昔もあり，程度は違うかもしれませんが，今に始まったことではありません。

私は，丁度修習終了と同時に東京在住の夫と結婚し，東京に住むようになりました。そのため東京には，夫やその家族以外に殆ど知り合いはいないという状態でした。大学も大阪です。弁護士として登録しようと思っても就職先がありません。若い女の子なんて誰も見向きもしてくれません。悶々としていましたが，結婚の挨拶状を出したところ，研修所の民事弁護教官の亡き輿石睦先生のご紹介で雨宮真也先生に拾っていただき，７年間修業させていただきました。まさに残りものに福がある！という感じで，ようやく５月になって東京弁護士会に登録できたのです。

現在の自分の手持ち事件を見ると，私自身の大阪時代のつながりで依頼されている事件なんてありません。弁護士になってからの人のつながりで来た事件ばかりで，忙しくて悲鳴をあげているくらいです。

これから活動される若手の弁護士の方々も，未来を信じて奮闘していただきたいと思います。